令和３年度内部評価結果

【令和３年度 MieMu の活動と運営全体の内部評価概要】

計画期間（４年）：令和２年度～令和５年度

１　計画の策定について

博物館の３つの使命　①三重の自然と歴史・文化に関する資産を保全・継承し、次代へ生かす　②学びと交流を通じて人づくりに貢献する　③地域への愛着と誇りを育み、地域づくりに貢献する　を達成するために、現在当館で必要な中間アウトカムを「(A) 三重の魅力を知り、(B) 博物館を利用してもらう」とした。これは、『三重県総合博物館の５年間の総括と今後の方向性について』で、課題であった①県全域への博物館活動の展開、②学びの向上、③博物館の経営にとって基礎となる活動の充実（調査・研究、資料の整理・保存）を基に策定した。この中間アウトカムを達成するために考えた戦略を６つ、それぞれに取組と結びつく戦術を１５考え、計画に対して行うマネジメントを評価する戦術と戦略を加え、合計７戦略１６戦術を定めた。

２　内部評価概要

○　「(A) 三重の魅力を知り」について

・　館内学芸員の年間研究成果公表数が34回、資料データベースの閲覧回数が607回で目標値を上回った。新規資料データの登録も763件となり、資料データベースの充実を図ることができた。

資料保存は定期的に収蔵庫内の清掃・点検を実施しているが文化財害虫が発見された。該当箇所の集中点検と低温殺虫処置を施し、現在は経過観察を続けている。今後も定期点検時に詳細な確認作業を行うとともに、追跡調査を継続していく必要がある。

博物館活動の根幹となる資料の収集・整理、管理、調査研究のための時間を確保できるよう各学芸員が業務マネジメントを進めるとともに、館としての体制づくりにも引き続き取り組んでいく。

・　新型コロナウイルス感染症の状況悪化や休館措置を講じざるを得ないなか、２本の企画展、1 本の移動展示を実施することができた。展示観覧者数は、基本展示については 34,990 人で目標値を上回り、企画展示は 28,875 人で目標値に達しなかった。ただし、観覧者アンケートの満足度は、基本展示、企画展示とも目標を達成した。基本展示ではリピーターから70%を超える安定した支持を得ることができ、企画展示では質、量、三重にこだわったオリジナルの企画等が評価されたと考える。

オンラインを活用した博物館のあり方や、企画展については新型コロナウイルス感染症にも対応できる企画・準備・実施体制を今後も検討していく。

・　学校を対象にした地域の参加型調査では、多気町内小学校５校のべ837 人が３項目の地域調査に取り組んだ。令和元年度の調査結果と併せ４項目の地域調査の成果を、移動展示で発表することができた。展示観覧者数は新型コロナウイルス感染症対策のため全てのイベントが中止となったにも関わらず目標値を上回った。満足度については博物館職員を会場に配置し、観覧者対応を行ったことが高評価につながったと考える。

学芸員による出張講座は、ホームページ上で募集を行ったり市町校長会で説明した結果、37 件 1,984

人の利用があった。講座主催者にアンケートをとったところ、80%以上の高い満足度の回答を得た。

職員負担を考慮した、移動展示の開催形態や運営の在り方、学芸員講座の内容精査や検討等を行っていく。

○ 「(B) 館を利用してもらう」について

・ ミュージアムパートナーについては会員継続率の高さや利用者数は増加しているものの満足度は低く、コロナ禍による活動制限や参加者の固定化等、新たな課題も生まれつつある。会員との意見交換を通して事業を進めていくことで、会員の自主的な活動に結び付き、新しい事業の方向性を作り出すことができると考える。また、発表会、フェスタ等で外部に魅力を発信し、一般利用者に博物館を利用した自主的なグループ活動があることを周知していく。

研究機関との連携では、企画展「寺院に伝わる戦国の残像～北畠氏のいた時代～」での三重大学、三重県埋蔵文化財センターとの展示物作成や、岐阜県博物館との交流で利用者が目標値を大きく上回り、満足度も 100%だった。企業連携事業であるコーポレーション・デーは１団体のみの実施だったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策の影響で自企業の広報が十分できず満足度が低かった。館内での来館者交流だけでなく、職員研修や屋外活動（観察会）等での企業との広報連携も深めていく必要がある。一方、研究成果を多くの利用者に伝えられる企画展での連携は、博物館が活性化し双方の資質・能力が向上していける新たな連携の形を切り開いたと考える。

・ 学芸員が知的資源やその活用方法をわかりやすく伝える事業では、MieMu@ほーむのページの定期的な更新や、展示会場で QR コードから動画を視聴できる展覧会と Web を組み合わせた取り組みを行った。『調べ方』を学ぶ事業については、新型コロナウイルス感染症対策を取りながらの実施となったが目標値を上回る利用者があった。学芸員と対話しながら自由に能動的に学んでいける博物館ならではのスタイルを大切にしながらも、オンラインや動画を活用した自主的な学びの方法を検討していく。コンテンツ作成や生配信といった非対面による実践を可能にしていくには十分な時間と技術を要する。そのためにも、人員・時間の確保、業務分担の明確化に向けた努力が必要である。

・ こども体験展示室の利用者は、新型コロナウイルス感染症の感染状況に応じて、閉室期間や学校団体のみの受入期間、夏休み期間の土日祝に３回/日の運用日を設ける等、柔軟な運営対応をとった結果、目標値を下回ったが 3,381 人の利用者があった。感染症対策と利用機会の確保を両立させていけるような運用方針を検討していく。

五感を使って体感できる事業も計画自体の見送りや中止となった事業があり、利用者は 634 人と目標値を大きく下回ったが、体験を通して新しい発見があるようなプログラムを実施していることが満足度の高さにつながったと思われる。引き続き、子どもたちが事業に参加することでより好奇心が伸び、博物館利用や学びへの興味が高まるきっかけづくりをしていく。

学校と連携した課題探求型学習については県内９校（2,714 人）を 48 日間に亘って支援し、目標値を達成することができたが、今後は館全体の業務量を勘案しながら取り組んでいくことを考える。